

平成19年度知床世界自然遺産地域科学委員会 第2回会議 議事概要

日時：平成20年3月11日(火) 9:30~12:30

場所：札幌学院大学社会連携センター 301教室

配布資料

- ・ 議事次第
- ・ 出席者名簿

- ・ 議事次第

議題1：世界遺産委員会の調査団の調査結果報告について

資料1-1：「知床」世界遺産登録時に決議された調査団の調査結果について

資料1-2：調査団への説明資料

議題2：各ワーキンググループ経過及び今後の予定について

資料2-1：各ワーキンググループの検討経過について

資料2-2-1：エゾシカワーキンググループ経過報告・今後の予定

資料2-2-2：知床世界自然遺産地域科学委員会エゾシカワーキンググループの設置について
(改正案)

資料2-2-3：平成20年度知床半島エゾシカ保護管理計画実行計画案

資料2-3：河川工作物ワーキンググループ経過報告

資料2-4-1：海域ワーキンググループ経過報告・今後の予定

資料2-4-2：多利用型統合的・海域管理計画

資料2-4-3：多利用型統合的・海域管理計画説明資料

議題3：今年度調査・事業について

資料3-1：平成19年度調査実施状況について

資料3-2：平成19年度事業実施状況について

資料3-3：知床調査報告会資料

資料3-4：知床データセンターの今後の方向性について

議題4：今後のモニタリングの進め方について

資料4-1：知床世界自然遺産地域における長期モニタリングと順応的・統合的管理の基本的
考え方

資料4-2：モニタリング調査表

議題 5：知床世界自然遺産管理計画の策定について

資料 5 - 1：知床世界自然遺産地域管理計画の策定について

資料 5 - 2：知床世界遺産地域管理計画目次案について

資料 5 - 3：知床世界自然遺産候補地管理計画

議題 6：利用の適正化に係る検討状況について

資料 6 - 1：利用適正化検討会議について

資料 6 - 2：知床半島先端部地区利用の心得パンフレット

資料 6 - 3：平成 19 年度知床国立公園の利用について

議題 7：科学委員会等の今後の予定について

資料 7：平成 20 年度の科学委員会等の日程

・出席者名簿

知床世界自然遺産地域科学委員会 委員		
北海道大学名誉教授		五十嵐 恒夫
専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授		石川 幸男
北海道大学名誉教授 (委員長)		大泰司 紀之
北海道大学大学院水産科学研究院教授		婦山 雅秀
東京農工大学大学院教授 (エゾシカWG座長)		梶 光一
酪農学園大学教授		金子 正美
北海道大学大学院地球環境科学研究科准教授		工藤 岳
専修大学北海道短期大学みどりの総合科学科教授		小林 昭裕
東京農業大学生物産業学部講師		小林 万里
野生鮭研究所		小宮山 英重
北海道大学大学院水産科学研究科教授 (海域WG座長)		桜井 泰憲
北海道立稚内水産試験場長		佐野 満廣
北海道大学総合博物館教授		高橋 英樹
斜里町立知床博物館長		中川 元
北海道大学大学院農学研究科教授 (河川工作物WG座長)		中村 太士
北海道東海大学教授		服部 寛
横浜国立大学環境情報研究院教授		松田 裕之
(以上 50 音順)		
関係行政機関		
北海道開発局開発環境課	課長補佐	西村 浩二
同	計画係長	中出 英一
斜里町総務環境部環境保全課	自然保護係長	増田 泰
同	自然保護係	村上 隆広
羅臼町経済部環境管理課	主事	遠嶋 伸宏

知床世界自然遺産地域科学委員会 事務局		
環境省自然環境局自然環境計画課	世界自然遺産専門官	岡野 隆宏
環境省釧路自然環境事務所	所長	北沢 克己
同	統括自然保護企画官	櫻井 洋一
同	自然保護官	水崎 進介
同	ウトロ首席自然保護官	高橋 啓介
同	羅臼自然保護官	若松 徹
北海道森林管理局企画調整部保全調整課	課長	徳川 浩一
同	自然遺産保全調整官	井上 正
北海道環境生活部環境局	参事（知床遺産）	小林 徹也
同	参事（知床遺産）主幹	尾谷 薫
同	参事（知床遺産）主査	上田 一徳
同	参事（知床遺産）主任	稲富 久昌
北海道水産林務部総務課政策調整グループ	主幹	鈴木 匡
同 治山課治山計画グループ	主幹	豊田 康弘
同	主査	小林 勝司
同 治山事業グループ	主査	千葉 和夫
同 建設部土木局砂防災害課	主幹	沼田 寛
同	主査	阿部島 啓人
網走支庁地域振興部環境生活課	自然環境係長	横塚 貴稔
根室支庁地域振興部環境生活課	課長	坂上 宏志
同 産業振興部林務課	課長	苗加 由治
同	治山計画係長	野原 重俊
同	主任	村山 政信
同 水産課	漁政係長	仙庭 和弘
知床世界自然遺産地域科学委員会 運営事務局		
(財)知床財団	事務局長	山中 正実
同	事務局次長	田澤 道広
同	事務局次長	岡田 秀明
同	保護管理研究係長	小平 真佐夫
同	保護管理研究係	野別 貴博

議事概要

< 環境省釧路自然環境事務所長挨拶 >

北沢所長) 本日は、年度末のお忙しい中お集まりいただき感謝する。科学委員の皆様には、日頃から世界自然遺産地域の管理につきの確な助言をいただいているが、とりわけ2月のUNESCO/IUCN 調査団の知床来訪にあたっては、当日の対応のほか、事前準備も含め様々な御協力をいただき、この場を借りてお礼申し上げます。世界遺産委員会からの正式な報告は後日になるが、全体として適切な取り組みが進められていることを評価いただいた。これは内容の問題だけでなく、地元との合意形成や、科学的知見を実際の管理に反映させていく科学委員会を中心とした仕組み等、方向性を含めた評価であると思っている。今年度は、本科学委員会の助言をもとに海域管理計画の策定や河川工作物の評価と改修の実施等の様々な事業を進めた。またエゾシカについては管理計画に基づく知床岬の密度操作実験を開始し、さらに利用適正化の取り組みに関しても「利用の心得」を策定させていただいた。現時点では、知床世界自然遺産地域の順応的管理がまずはスタートを切ったという段階であり、今後さらに科学的な知見に基づいたフィードバックが重要となる。これからも様々な議論、助言をいただいた上で、順応的管理を実施していきたいと思っている。本日も短い時間だが、忌憚の無いご意見をいただければ幸いである。よろしくお願ひしたい。

< 配布資料確認 >

櫻井次長) 今回の会議から北海道開発局もオブザーバーとして参加していただくことになった。議事に入る。ここからは大泰司委員長に進行をお願いする。

議題1：世界遺産委員会の調査団の調査結果報告について

岡野専門官) 「資料1-1」に基づき概要説明。

大泰司委員長) 当日直接対応された松田委員(シカ管理)、桜井座長(海域)、中村座長(河川工作物)から細かいニュアンスも含めてお話しいただきたい。

松田委員) 世界自然遺産の核心地域での人為的なシカの捕獲に関して理解を示してもらったことは重要であり、世界遺産条約全体にとっても大きな意義がある。自然植生の更新プロセスに関して必要最低限の人為介入を行なうという説明をした。その他、シカ管理計画の枠組みは立派だが評価基準は何なのかという指摘があった。指標を作って管理に生かす体制を早急に築いていく必要がある。これは重要な宿題だと思っている。

中村座長) 調査団への説明はマスコミ公開の方がよかったと思う。非公開の結果、情報が正しく伝わらず、実際とは異なるネガティブな報道が行われてしまった。

UNESCO/IUCN からは現状の取り組みについて非常に高く評価していただいた。ただし長期

的な目標を定めて引き続き改善を進めること、特にルシャ川の状況のさらなる改善について指摘があった。委員 D から、良好な環境が残っているテッパンベツ川を理想の河川として、比較対照しながらルシャ川の状況を見ていくという点についても意見交換があった。長期的視点に立ち、土地利用も含めて地域の合意も得ながら進めてほしいというのがメッセージだったと思う。

意外にも調査団側から孵化事業やサケ科管理計画の話はなかった。しかし、科学委員会としては孵化事業も含めて議論していかねばならないと思っている。サケ科管理計画は、全体の世界遺産登録地管理計画の策定の際に含まれればよいということだった。

河川工作物への対応は、良い取り組みなので、G8、COP10 で発表してはどうかというコメントもいただいた。個人的には対策をレポートとしてまとめ、英文で雑誌に出すことを考えている。

桜井座長) 新聞報道と実際が異なっていた。マスコミに対しては公開すべきだった。

海域管理計画に対しては高い評価をいただいた。特に実際に漁業に携わっている現場の方々が、持続的な漁業を前提にボトムアップ的な管理をしているということと、それに対して、行政、科学委員会が助言、指導する形で関わっていくという連携について評価された。

解決すべき課題としては、絶滅危惧種のトドの保全について、もう少し慎重に扱うべきという提言があった。解決できない課題ではないので、今後も海域 WG で議論していきたい。

また、ロシア側との問題があることを調査団も十分理解しており、ロシア側との協議を模索しつつも、沿岸漁業としてできる取り組みも継続してほしいとのこと。生態系を保全しながら漁業で生活できる場を確保することに対しては、十分理解するとのことであった。

海域を含めた数少ない世界遺産のモデルとなるようにと励ましを受けたと理解している。

大泰司委員長) これほどの科学的国際ネットワークと、国際レベルの議論を進めている点で、期待よりもはるかに高いレベルであったことに驚いたと言っていた。いずれにしても、漁業が行われ、防災ダムがある世界遺産が評価されたことは重要であり、課題も残っている。今後も引き続き行政との協力体制で計画を練っていく必要がある。

議題 2 : 各ワーキンググループ経過及び今後の予定について

水崎自然保護官) 「資料 2-1」に基づき、概要を説明。

梶座長) エゾシカ WG 経緯について簡潔に説明。

モニタリング結果から、植生やシカ個体数に大きな変化はない。土壌浸食も新たに大きくは生じてはいないが、シカの高密度状況は続いている。

大きな動きとしては、核心地域内の特定管理地区である知床岬で昨年 12 月から密度操作実験が進行中であり、メス 150 頭の捕獲を目標としている。5 月までの結果をもとに評価をしたい。

また、隣接地区では北海道のシカ管理計画とリンクしながら、輪採制という仕組みで個体数調整を開始した。日本初の取り組みであり、評価はこれからになる。

今後の重要なポイントは、どのように評価基準・指標を作っていくかということだ。

UNESCO/IUCN からも指摘を受けた。すでに準備は進めている。この評価基準をもとに実際の管理を進めていくことになる。

大泰司委員長) 各WGの設置目的や継続についてはどのようになっているか。

櫻井次長) 「資料 2-2-2」に基づき説明。

エゾシカ管理計画は、既に計画が策定されて事業に入っているため、設置目的を変更したい。具体的には、保護管理計画を推進するということと、策定された保護管理計画の見直しに対して科学的知見から助言をとということで設置目的を変更したい。目的変更や今後のWGの存続については、第2回エゾシカWGにおいて合意を得ている。この場で設置目的変更とWG継続について確認させていただきたい。

大泰司委員長) 意見はあるか。ないようなのでシカWGについては設置目的を変更して継続する。次に河川工作物WGについて説明いただきたい。

中村座長) 2005年に設置されて3年間を目標としてやってきた。WGは今年度で閉じることになる。

これまでに遺産地域内の100基と羅臼川の18基の工作物について検討を進めてきた。52基は上流に産卵・生息環境がない、現状でも遡上できるという状況であり現状維持である。35基は、防災機能への全体的な影響が大きすぎる、防災対象が近すぎるために現状維持とした。ただし、現状維持と評価したものについても、将来的に保全対象自体の状況が変化したり、土地利用の整合性を変える、すなわち被災対象を安全な場所に移転できれば、基本的に地域の合意の上でさらなる改良を否定するものではない。この35基は優先順位が低かったということである。

残った13基+羅臼側の18基のうち、25基は改良済み、あるいは、改良中である。現状としては、全体の約半分がサケ科魚類に影響がなく、そのうちの約半分くらい、全体の約4分の1を改良すると決めて、7~8基は既に工事に取りかかっているが、今後も徐々にやっていくということだ。

改良後あるいは今後改良する工作物についての効果の評価を実施しなければならないが、今後のモニタリングの結果による効果の評価や公表等については科学委員会で議論していただくということでご了承いただきたい。

徳川課長) 現状のすべてのダムについての評価は終わったと考えている。今後は各設置主体が順次ダムを改良する作業が続き、改良後約3年間はサケ科魚類の遡上状況をモニタリングしていく。その後でまたWGが必要であれば考えたいが、現WGの体制は一度閉じさせていただきたい。河川生態系やサケ科魚類全体の話が、改めてUNESCO/IUCN調査団から出てくるかもしれないが、そこは現WGのミッションとは異なる大きな枠組みとなるので、対応するための枠組みは改めて検討しなければならない。

大泰司委員長) 河川工作物WGは閉じるが、モニタリングは科学委員会として継続する。UNESCO/IUCN調査団から来ることが予想されるコメントにもよるが、流域生態系の保全とい

う枠で議論が必要かもしれない。現 WG は閉じることでよいか。

一同) 異議なし。

大泰司委員長) よいようなので、本 WG は閉じることにしたい。

委員 B) 「資料 2-2-3」のエゾシカ実行計画 p.4 モニタリング調査一覧の中で、先日のエゾシカ WG で指摘したことが反映されていない。具体的には特定管理地区の知床岬にある 1 ha の森林防鹿柵のモニタリング調査、もう一つは、半島の先端部地域を対象とした広域採食圧調査を 2008 年度に実施すべきところであるが、それらの調査項目が漏れている。ぜひ修正してほしい。実施主体がどこかは別として、必要な調査項目をきちんとリストアップし、実行に向けた調整を行ってゆくことは非常に重要なことである。

徳川課長) 来年度の計画なのでまだ具体的なことを言える段階ではないことを了承いただきたいが、広域採食圧調査については引き続き森林管理局で実施できるよう検討している。次回シカ WG ではある程度説明できるようになると考えている。

櫻井次長) 必要な変更は 6 月の次回シカ WG で提示する。今、盛り込まれていないものがあったとしても、次回 WG において実行計画に取り入れて行くことは可能。

大泰司委員長) 次に海域管理計画について説明を。

桜井座長) 海域管理計画を作り、それに基づいて UNESCO/IUCN 調査団への対応をした。座長として一つお願いがある。今後、温暖化と日口のことが重要で、特に日口関係については、オホーツク海全体も含めて、海流や海洋環境の問題があるので、海域 WG 委員については追加、あるいは入れ替えを検討いただきたい。オホーツク海の海流や海洋環境の変遷については専門家もいるし、衛星を使ったモニタリングを行っている研究者もいる。これらの人材も加えて今後のモニタリングのあり方を検討することを提案したい。

小林参事) 海域管理計画については、UNESCO/IUCN の高い評価をいただいた。海域管理については、関係機関が連携して進めて行く。それを支援・評価いただくために WG の継続が必要。

現在の海域 WG の設置目的は、海域管理計画策定にあたっての科学的立場からの助言であったので、これを「海域管理計画の推進状況と見直しに対する科学的立場からの助言」に変更して今後も継続していきたい。継続については 12 月 25 日開催の海域 WG の中では合意されている。科学委員会でも承認いただきたい。

大泰司委員長) 継続について何か意見はあるか。

一同) 異議なし。

大泰司委員長)日口、オホーツクの観点から委員の入れ替え、あるいは、追加という提案があったので事務局はよろしく検討を。海域 WG も設置目的を変更して継続することとしたい。

議題 3：今年度調査・事業について

水崎自然保護官)「資料 3-1、3-2」について概要説明。

9月の科学委で、科学委に北海道開発局も加えるべきという指摘があり、今回から関係行政機関として加わっていただいた。また、事業実施状況も提出いただいた。

高橋首席自然保護官)「資料 3-3、3-4」について概要説明。

調査報告会は「資料 3-3」のプログラムで昨日実施された。知床データセンターについては、科学委委員などからあるべき姿についてヒアリングを行い、海外事例なども検討。「資料 3-4」の 4(1)-(2)の方針で検討中。

大泰司委員長)石城前委員長からの引継ぎの提案でもある環境に影響を及ぼしうる事業に関する報告は「資料 3-2」。これも含めて意見を戴きたい。

中村座長)知床データセンターはデータの蓄積と公開のキーとなる。モニタリングの結果をどのように蓄積していくのか。第三者が見てわかるデータにして入力すると、大変な労力が必要であり、モニタリング予算の 20%程度をデータ管理に回さなければ維持できないだろう。環境省がずっとやっていくのか。データセンターなので新たな情報を次々に更新しなければ意味がない。随契の問題もあって、エンビジョンにずっとやってもらうのも難しいだろう。継続性に課題がある。

高橋首席自然保護官)環境省が直接管理するのではなく、今後も業者に委託していく考え。委託にあたっては、よほど特殊なもの以外は、入札にならざるを得ない。

中村座長)次々と業者が変わっても大丈夫なのか。

委員 C)データセンターには二面性がある。例えば、博物館の標本庫のように、お客が来なくても資料をとって置くという面と、来館者に見せる面の 2 つである。見せる部分については管理者がどんどん替わっていいと思うが、標本庫のようにしてデータをきちんと保管管理する部分は管理主体がしっかりとやらなければならない。50年、100年にわたり、しっかりとしたデータを残して将来の人たちが過去のデータを速やかに引き出せるような仕組みを作っておくことは大きな課題だと思っている。

委員 D)私個人の膨大なデータをエンビジョンでデータセンターに載せたいといていたが、どうい

う形で渡せばよいのか。私が見れば分かるが、他人が見ると分からない状態になっている。膨大な時間をかけて万人が分かるように加工しなければならない。1~2年間、野外調査へ出るのを止めなければ困難である。データを差し上げるのは良いが、万人が分かるようにするにはどうしたらよいのかという知恵を出していただきたい。

北沢所長) データセンターは環境省が中心となってはじめたものなので、やり続けるしかない。いろいろなやり方があるが、専門家にも相談しながら委託業者が変わってもデータの更新や維持はしっかりと継続できる形を考えたい。生物多様性センターでは、サーバーは自ら持ち、管理は請負に出している。このやり方も参考にし、また、同センターと連携していきたい。過去のデータを整理するのはたいへんであり、当面はこれから新たに蓄積するもののフォーマットを決めて少しずつ充実させていきたい。

委員 C) 自分は「モニタリング 1000」の方の委員もやっているが、メタデータの入力や管理、委員 D の指摘のような課題は非常に難しい。個人所有の情報を不特定多数に使ってもらって良いのか、アセス業者などにも使わせるのか、環境省だけしか使えないのか。データを提供する人に対しても約束事を決めるべきとの議論があった。知床でも要検討である。

生物多様性センターのシステムはセキュリティが厳しくなり、一般の人がアクセスするのは今後難しくなっていく。釧路の自然再生事業のデータセンターでサーバを借りようとしたが断られた。第三者機関の中にサーバを作り、公開するものだけを生物多様性センターのサーバに入れるような工夫も必要。生物多様性センターを管理する環境省の職員が数年で変わることも問題。専門性がある機関がアウトソーシングで継続的に専属職員をおくことも一案だろう。

大泰司委員長) 本件については、モニタリングとも関連してくるため、今後引き続き議論をする。問題点については、委員 C から詳しい説明があったので議事録に残す。

村上: 斜里町) 研究データばかりでなく、斜里町の「しれとこ 100 平方メートル運動」における資料の蓄積がかなりあるので、是非、データセンターとの連携を考えていきたい。

大泰司委員長) 自然環境への影響をおよぼしうる事業の報告について、現地を熟知する知床財団から意見等はないか。

山中) 「資料 3-2」は社会環境モニタリングの一環であるが、その内容や記載の仕方については検討途上のものでまだ十分ではない。例えば一例だが、北海道事業の 8、道道知床公園羅臼線の雪崩予防柵 415 基というのはものすごい数であるが、その必要性、あるいは、新規なのか継続事業なのか分からない。また、本事業は柵の設置ばかりでなく、工事にもなって法面への牧草の張り付けも含まれるだろうが、エゾシカ WG ではシカの越冬環境の改変による個体数の抑制が提起されており、餌条件を人為的に良好にしてしまう法面緑化の手法が問題視されている。こういったことがわかるようなフォーマットが必要ではないかと思う。

大泰司委員長) 本件については、自然環境モニタリングとワンセットになっている重要事項なので、今後、科学委員会と事務局で話し合ってフォーマットをきちんと作っていくという事をお願いしたい。議題3について何か追加意見はあるか。

委員D) これまでの科学委員会でも何回か話をしているが、外来種の問題に関する項目がない。ぜひ加えて欲しい。具体的には、知床五湖のフナは、開拓時代に食糧資源として入れたという記述を目にしたことがある。歴史を見る上では重要かもしれないが、自然遺産地域に人為的に放流した魚であり、検討課題ではないか。また、羅臼町の3~4河川においてニジマスが確認されている。北海道はニジマスを外来種として問題にしていらないが、遺産地域としては問題であるため報告に入れて欲しい。

大泰司委員長) 了解した。遺産管理計画の中にアライグマやミンクなどの外来種の問題があるので、その中に項目として入れることで検討したい。

議題4：今後のモニタリングの進め方について

櫻井次長) モニタリングの基本的考えについて概要を説明。

「順応的」かつ「統合的」管理というセットの言葉として使っていきたい。

調査項目は、本年1月9日に9名の委員に参集いただき議論してもらった。その結果に基づいて整理したのが「資料4-2」。しかし、当日は時間もなく、まだ十分絞り込むことができていない。これをさらにどのように絞り込むかが課題。

本日、細かい検討は無理かもしれないが、基本的な考え方を了解いただければ、事務局として検討を進めていきたい。

「資料4-2」の「評価方法」は空欄となっているが、これは評価基準が必要とのUNESCO/IUCN、及び、科学委からの指摘に対応するもの。これについてはすべて明確にできないものもあるだろうが、今後検討して書き込んでいきたい。

大泰司委員長) 「基本的考え」は今後の基調となる重要文書。議論いただきたい。

梶座長) 「資料4-1 別紙」の図について、Cは個体数が増加すること自体は問題ではなく、「増えたことによる悪影響が問題」であり、Dは「減らして悪影響を軽減する」というのが適切。

委員E) IUCNからも気候変動に関するモニタリングの提案があった。温暖化を見ていくのであれば気象に関するデータ(気温、流氷など)を整理してモニタリングとする事も必要。知床ではあまり十分に観測点がない。不足分を充実していくことが必要ではないか。知床データセンターとも関連がある。

委員F) 気象データは気象庁による観測ばかりでなく、北海道開発局の知床横断道路での観測や、海

上保安庁の灯台でのデータ（知床岬等 4 つの灯台があるがデータの有無は未確認）漁協のものなどいろいろある。それらを一覧にして保存し、使うことができる状態にして知床データセンターに整理できたらよい。

大泰司委員長）事務局は難しそうな顔をしているが、委員 F か委員 C にお願ひできないか。海域はどうか。

桜井座長）気象については地質調査所のデータベースや沿岸水温の記録などもある。非常に大事なことなので、みなさんが知っている情報を集約すべき。

北沢所長）とりまとめは環境省でやる。どこにどういう情報があるのかという情報をいただきたい。

桜井座長）気象庁が戦前からとっている。

北沢所長）今月中に水崎まで連絡を。

委員 C）別の環境省事業でオホーツク海の陸と海の総合データベースを作っているところ。そこでもリストを作っているのだから、水崎さんまで送りたい。

委員 A）知床でやるべきことと、全国的に広域でモニターすべきことが整理されていない。温暖化など気候変動はまず全国レベルでみていかなければならない。「資料 4 - 2」にはあれもこれも盛り込むのではなく、世界遺産のモニタリングとしてではないものと、遺産だからこそやるものを差別化し、ぼやけないようにしてほしい。A~D の図については、コントロールのためにアクションを起こすことができるものとできないもの（温暖化など）がある。そこも整理すべき。また、評価方法の項は埋めていかねばならない。空欄ばかりではない。

櫻井次長）知床だからこそ必要な項目とそれ以外のもの、あるいは漏れているものもありうる。管理が可能なものとそうでないものもあり、整理していききたい。相談に乗っていただきたい。

委員 G）コンセプトと用語の定義が良くわからないところがある。

社会環境は生態系の中に含まれると思う。「社会環境も含めた生態系のモニタリング・・・」と変えるべき。「順応的かつ統合的」では、何を「統合」するのが意味がわからない。順応的管理は本来合意形成の上で進めていくことが基本であり、そういう意味では官学民総意で取り組むガバナンスという概念であれば、「総合的」ではないのか。望ましくない変化というのは恣意的な表現。あるがままの変化をモニタリングすることが必要。モニタリングの結果のアウトプットが、調査報告会をやり、要旨集をまとめるだけというのはおかしい。生態系モニタリングにある目標と目的が、社会環境モニタリングには書かれておらず不明確。モニタリングと調査研究が混同されている。モニタリングは評価基準に基づき粛々と行い、得られたデータと情報に基づき、次の評価あるいはモデルへフィードバックするのが順応的管理の基本ではないのか。

調査研究は事実の科学的探求である。

委員 H) については委員 G と同意見。生態系モニタリングを自然環境モニタリングとすれば の社会環境モニタリングとうまく対比できてよいのでは。調査とモニタリングが混在しているのも同意見。

大泰司委員長) 調査とモニタリングは分けるべきだろう。

櫻井次長) モニタリングは調査手法が確立された後の継続的なもの。調査は手法の開発も含めたものと考えた。これらは整理する。

委員 G) モニタリングのアウトプットが、調査報告会だけではない。

大泰司委員長) についてはそれだけしかやらないとは書かれていないが・・・。

委員 D) 斜里町立知床博物館で「知床ライブラリー」という書籍を発行している。一般への実施結果の公開はああいうまとめ方がよい。

大泰司委員長) 要旨集作りがモニタリングの目的というように読めてしまうきらいはある。

委員 G) 「生態系モニタリング」の項についても、その目的を「社会環境モニタリング」の項の最後のポツのようにすべきでは。

櫻井座長) モニタリング結果はまとめて記録に残すべきという意図である。生態系も社会環境もまとめて報告書にしたいと思う。

大泰司委員長) について、「生態系のみならず、社会環境・・・」と分けた意図は？

櫻井次長) 当初は自然環境のみと考えており、その後社会環境も必要ということで追加した経緯がある。

山中) は委員 G の言うとおりであり「社会環境も含めた生態系のモニタリング・・・」が良いと思う。また、委員 H の言われるように「生態系モニタリング」の項は「自然環境モニタリング」とすればすっきりするだろう。

委員 A) 「生態系モニタリング」を「自然環境モニタリング」とすると、漁獲量、トドの被害の調査がどちらに入るかわからなくなるのでこのままでよい。

大泰司委員長) では、「はじめに」の中の記述は「社会環境も含めた生態系のモニタリング・・・」

とし、「生態系モニタリング」の項はそのままとする。

委員 I) ここでの議論がこれから作成する登録地全体の管理計画の中でモニタリングの基調として反映されることになると思うが、細かい議論は今やらなくてもよいのではないか。「資料 4-2」の「評価方法」の項が重要である。これによってモニタリングも変わり得る。基本的な考え方はよいとして、登録地管理計画の策定の過程で改めて整理すればよい。

大泰司委員長) 細かい議論を今はしなくてもよいだろう。基本的な考えはここまでの議論でひとまずよいとして、絞り込みの考え方についてはどうか。

中村座長) 評価基準(「資料 4-2」評価方法)を出していき、欄を埋めることが可能なものはモニタリングとしての優先順位を高くし、評価基準を定められないものは、定めるべくまずは基礎的研究をがんばってもらうということにはいかがか。

梶座長) 委員 G の言う「望ましくない変化」については、避けるべき状況が明確化していて、それについて評価可能なものは優先されるという考えにしてはどうか。

委員 F) 「望ましくない」だと回復が入らない。管理目標を決めることが必要なのではないか。

大泰司委員長) 中村案など今出たアイデアも含めて、選定はケースバイケースとなるだろう。

櫻井次長) 次年度当初に事務局案を作成するので、個別に委員と相談させてほしい。

中村座長) 事務局では細かい評価方法の設定は無理だろう。各委員に依頼すべきなのは。

大泰司委員長) 各委員はそれでよろしいか。評価基準を定めることができない項目は選からもれるかもしれないのでがんばってもらいたい(笑)。

委員 J) 植物のインベントリはモニタリング調査項目案にもともと入ってはいない。モニタリングとインベントリは別物で構わないが、インベントリも重要であり、きちんと議論して位置づけてほしい。

大泰司委員長) インベントリは別途重要な項目である。中村案の視点は重要であろう。各委員はあれもこれも盛り込みたがるのではなく、また、事務局がエイヤと作るのではなく、各委員が評価方法も含めて案を作るということで検討したい。これについてはまたこの後で再度議論する(注: 議題 5 の中で再度議論あり)。

<< 休 憩 >>

議題 5：知床世界自然遺産管理計画の策定について

櫻井次長) 知床世界自然遺産管理計画策定の基本的考えについて概要を説明。

中村座長) UNESCO/IUCN 調査団からの提案についての方針を科学委員会としてどう考えていくかを議論しなければならないので、10月に素案はできないのでは。長期的な方針の議論が必要。例えば、ルシャ川のダムの問題については、防災対象である保安林管理車道は必要なのかどうか、河川工作物に関する土地利用との整合性、海域のトドの問題など等課題がある。遺産登録地になった段階でしっかり議論すべきことがあったということである。

桜井座長) UNESCO/IUCN からは7月にはアクションがある。それが見えた段階で検討することになるだろう。今はまだ科学委員会やWGがどのように対応していくべきかが見えない。

委員 D) ルシャ川とその周辺の流域をどうするべきかというプロジェクトチームを組むべき。この地域のヒグマの問題、多くの人々が関心を持つ地域をいつまで閉鎖したままにしておくのか、ダムの問題、税金をかけて林道を維持することの是非など、科学委としてルシャ地区の生態系を次の世代にどう引き継ぐのか具体的検討が必要。

梶座長) UNESCO/IUCN は「査定」にきたのであり、その結果の勧告などがあれば、それらへの対応を登録地管理計画に反映させるべき。現在の事務局案はマイナーチェンジであり、これでは耐え切れないであろう。しっかりした見直しが必要。委員 D の案は具体的すぎるのでとりあえず保留で、登録地管理計画が定まった後の段階で、個別地域の課題を検討という順序だろう。

委員 D) クマの問題は急ぐべきと思う。羅臼川にもサケが上がって、市街地にクマが出ている。ルサフィールドハウスのところもクマがいる。どう対応するのかという方向性を示してほしい。

大泰司委員長) 現地に詳しい知床財団からコメントを。

山中) 国立公園管理上も遺産登録地の管理上もヒグマは知床で極めて重要な課題。例えば河川工作物の改良の結果としてサケマスが溯上できるようになり市街地での出没が増加したり、公園利用との軋轢も高まっており、IUCN の評価書でも指摘された。人身事故の危険性が高まっている。エゾシカ保護管理計画の次のステップとして、ヒグマについても明確な方針を定める管理計画が必要と考えている。

ルシャ地区については、モニタリング項目の選定の中でもホットスポットとして選定すべきという意見がある重要な地域。梶座長の指摘にもあったように、世界遺産登録地管理計画はマイナーチェンジではなく、しっかりと見直した総合計画として、その上でルシャ地区のホットスポットとしての管理のあり方を考えていくべき。

櫻井次長) 課題には対応していく。全体の方向性は考えていきたい。孵化事業や野生サケについてはこれからだが、河川工作物など直近の課題には対応してきた。これまで議論してきたがまだ解決していない課題については、世界遺産登録地管理計画に書けるレベルで盛り込んでいきたい。すべて解決してからでなければ書けないということでは、いつまでたっても計画を作れない。

北沢所長) 登録時の宿題には方針が出ている。7月に正式なコメントが来るし、その前に書簡が来るので、そのときにさらに追加的な課題があれば、スケジュールも含めて再検討したい。

大泰司委員長) 北海道森林管理局、北海道もそれでよいか。

森林管理局、道) よい。

委員 K) 世界遺産登録地の目次の3(4)ア～オの中に菌類を入れてほしい。

大泰司委員長) もう一度モニタリングの話に戻りたい。中村座長案、事務局案など各種意見が出ているが何かよい案はないか。

委員 A) 世界遺産として必要なものを選定し、評価方法を委員に検討してもらうのがよい。

委員 I) 私の理解が間違っているのかもしれないが、世界遺産特有のものだと、海域は「海洋観測ブイ」だけになる。事務局案の「資料4-2」は他機関が別の目的で行っているものも含めて遺産地域のモニタリングにも該当しそうなものをリストアップしたもので、海域WGの検討が必要であり、委員Aの案でとらえている内容とは大きな差がある。

委員 A) 例えばトドは全道的な来遊状況調査が必要である一方、アザラシは世界遺産の調査としてやる必要があるなど、違いがあるものが混在している。

櫻井座長) 評価方法、評価の結果をどう反映させるかなどの課題を整理することが必要。その中で世界遺産に特有の調査など考えたい。海域WGとしてモニタリングの絞り込みを議論させてほしい。

櫻井次長) まだ十分整理しきれないところがある。再度、代表の委員の方々に集まっていただくか、あるいはメールで協議するかなど、絞り込みの手法についてまた相談させてほしい。

大泰司委員長) 世界遺産登録地管理計画については、本日の議論を踏まえて、先送りとはなるが再検討してほしい。

委員 A) サケ科管理計画に該当する部分をどこでやるのか、新たにWGを作るのか今決めないといけない。積み残しては検討を進めることができない。

大泰司委員長) サケ科管理計画に加えて、流域生態系としての保全の課題、ルシャ・テッパンベツのこともある。

委員 I) 想定はしておかねばならないが、場合によっては、UNESCO/IUCN の書簡で指摘されないという事もありえる。

櫻井次長) サケ科管理計画などについては、新たな WG が必要かどうかなども含めて合同事務局として検討したい。

中村座長) WG を作ってある課題について短時間でまとめるには、WG で検討する課題を単純化しておく必要がある。複雑な課題を検討する WG は作らない方がよい。サケマスの管理については、科学委ではどのように考えるのか。地域との合意も必須。そういうことが可能な土台(仕組み?)作りがまず必要。

櫻井座長) 提案したい。UNESCO/IUCN から書簡などが来たら、各座長を窓口としてそれぞれの専門家と検討し、事務局とも協議をする。その上で対応案を作り、科学委へ提案することでどうか。

大泰司委員長) 事務局はそれでよいか。

事務局三者) よい。

委員 I) 海域管理計画で科学委員会をすでに明記しており、登録地管理計画の推進管理に関わるところで科学委員会の位置づけを明示してほしい。各委員会や地域連絡会議との関係などの整理も課題である。科学委員会の位置づけについては科学委発足の初期に議論しており、世界遺産登録地管理計画策定の機会に過去の議事録にも目を通され見直してほしい。科学委員会の事務局長からの委嘱という委員の委嘱のあり方も問題である。また、単年度ではなくて3~5年単位などにはできないか。毎年の委嘱では不安定的である。

櫻井座長) 先ほどの提案の件で追加事項。UNESCO/IUCN から書簡などが来たら、まず事務局から科学委委員長に諮り、それを経て各座長へ検討を依頼する形を取るのが筋だろう。

大泰司委員長) 事務局はそのようにしてください。

議題 6 : 利用の適正化に係る検討状況について

高橋首席自然保護官) 「資料 6-1、6-2、6-3」をご覧いただきたい。時間がないので説明は省略する。

一同) 質疑なし。

議題 7 : 科学委員会等の今後の予定について

増田 : 斜里町) 科学委員会での議論が地域の場に伝わっていない。地元向け報告会や地域連絡会議でもっと詳しく話してもらおうとか、科学委員会の議論が地元へうまく伝わる仕組みがほしい。

大泰司委員長) 両町からの意見ということで、事務局はよろしく検討を。

委員 G) 「資料 7」の今後のスケジュール案では、次回海域 WG の開催が 1 月であり、内容としては「モニタリング結果の報告」となっているが、現時点でモニタリング内容そのものをどう決めるかという議論は未了である。10 月頃に遺産地域管理計画素案をまとめるとするならば、それ以前の早い段階でモニタリングに関する議論が必要だろう。これは他の WG でも同様のことと思う。

大泰司委員長) これは現時点の案。これらのスケジュールも含めて当然変更があり得ると理解している。

本日の議題は以上。

櫻井次長) 大泰司委員長の議事進行に感謝したい。これをもって平成 19 年度第 2 回知床世界自然遺産地域科学委員会を終了する。

(以上)